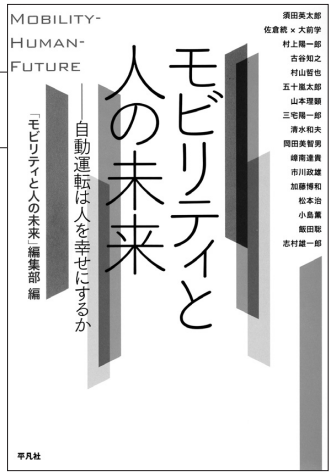
「モビリティと人の未来」編集部＝編集

モビリティと人の未来
―自動運転は人を幸せにするか―



2019年2月発行
本体2,800円＋税
平凡社
ISBN 978-4-582-53226-5

谷口　守
TANIGUCHI, Mamoru
筑波大学システム情報系社会工学域教授

楽しい本である．たとえて言えば，まるでバイキング料理のようだ．執筆者はそれぞれの専門分野から総勢18名．書き方や内容を特に調整している様子はうかがえない．自動運転というキーワードのみ著者間共通で，あとは素材の切り取り方も味付けもそれぞれに自由奔放である．全部で16章ある各章のポイントとなる用語を独断で抜き出して並べてみても，「幸せ」「安全・安心」「戦略」「つながる」「管制システム」「ゲームAI」「ロボット」「イノベーションジレンマ」「建築」「都市」「公共交通」「高齢ドライバー」「パーソナルモビリティ」「運輸人手不足解消」「農業自動化」「電力事業」とそのカバーする範囲は極めて広い．自動運転がタイトルにつく書籍は近年とみに増えているが，その中でも異色の存在といえよう．また，内容から判断し，自動運転だけの領域にとどまらず，いわゆるCASEと呼ばれるモビリティ・イノベーション全体を視座に含めた書籍と位置付ける方が適切だろう．

各章ごとに書きぶりは散文的であったり，データに基づいたり，また長い章あり短い章ありで自動運転に対する見解自体もそれぞれに異なるが，読者は自分の取りたいものだけを取ればよい．興味が無い章は読み取ばしても，またどこから読んでも差し支えなく，少しでも自動運転に興味があるならだれでも軽い気持ちで手に取ってみることをおすすめしたい．個性ある内容の章が多く，その意味では味付けは全体に濃い目で香辛料がかなり利いた章もある．

また，皿数が単に多いということだけではなく，運輸政策研究の読者があまり今まで目にしたことの無いエスニックな料理も少なくない．交通関連の書籍であれば自動車メーカーや交通事業者，インフラ整備主体などが今までの調理人の定番であったが，本書では哲学者，レーシングドライバー，航空管制官，AI開発者，建築家に加え，ロボティックスや公衆衛生，エネルギー，デジタルビジネスの専門家などによる色どり豊かな料理の提供がなされている．まさに自動運転時代において，如何に交通に関わるプレイヤーが拡張していくのかを肌で感じる上での最良の書ということができよう．なお，唯一の心残りがあるとすれば，デザートとしてまとまった参考文献リストが欲しかったということは贅沢すぎるだろうか．

紙数の制約から個々の章の内容をすべて紹介できないのは残念だが，個人的に心に残った名フレーズをいくつか集約した形であるが，下記に例示しておく．

- いずれ自動運転より人間が運転してくれた方が有難がられるようになる．(p.27)
- 電気自動車は必ず普及するが，それは地球環境のためではなく，地方にガソリンスタンドが無くなるから．(p.36)
- 自動運転では個車ではなく交通量を航空管制のような仕組みでサーバー管理する「交通流管理」の概念が必要である．(p.84)
- 自動運転車を受け入れ難いとする理由は，突き詰めると自己中心的な発想が多い．(p.91)
- ゲームキャラクターと自動運転車は似ている．(p.92)
- 自動運転システムはそのセンサーの信頼度に応じて，その「弱さ」をドライバーに開示するのも一つの方法である．(p.123)
- 自動運転される都市とは，管理都市そのものである．(p.145)
- 自動運転導入は運輸業界での人の仕事を奪うものではない．人間は人に適した業務に専念できるようになり，サービス向上にもつながる．(p.212)

自動車が普及してまだたかだか100年少々だが，この間に自動車は我々の暮らしや都市構造を根本から変えてしまった．行間からその速度がさらに早まることが垣間見える予言の書でもある．それに怯むのではなく，我々自身がその中に飛び込んでより良き社会へとマジメントしていくためのスタミナを本書から仕入れたい．